

393-756



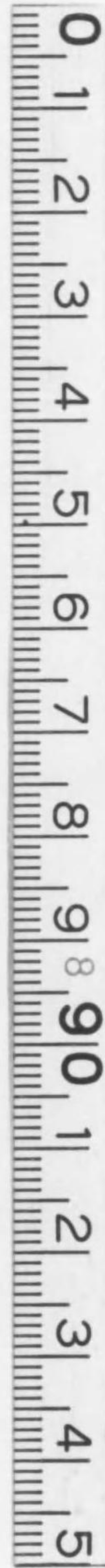
1200501462602

393

756

東亜研究講座
第十六輯
支那古陶磁の話

小森 忍著



始





小森 忍 著

支那古陶磁の話

東亞研究講座
第十六輯

東亞研究會發行



小森 忍 著



支那古陶磁の話

東亞研究講座
第十六輯

東亞研究會發行



393-756

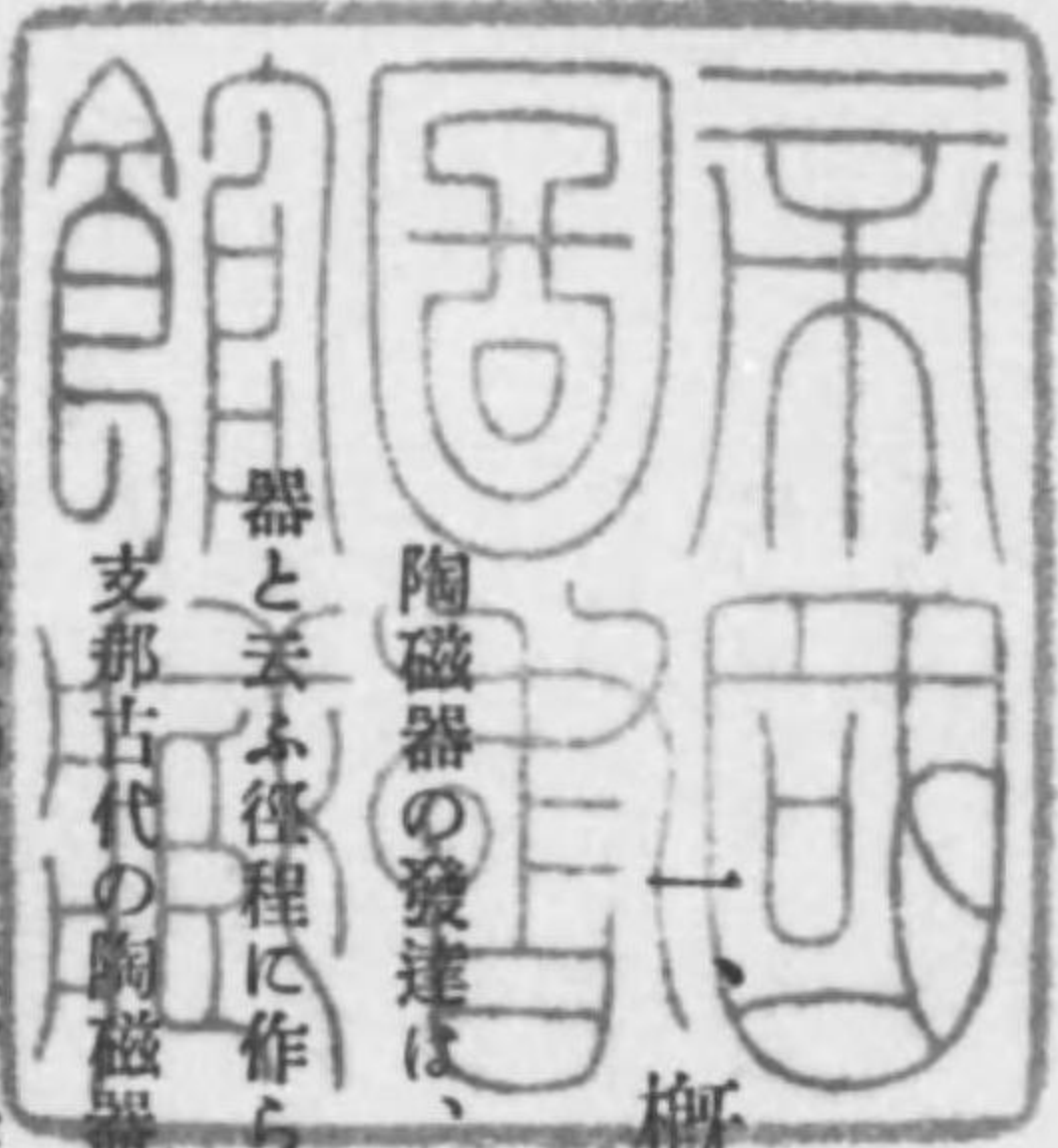
目次

一、概說 (一)
二、系統 (五)
三、品質 (一八)



支那古陶磁の話

小 森 忍



概 説

陶磁器の發達は、其品質の上から見て、何れの國も、土器、若しくは瓦器から、陶器、炆器、磁器と云ふ徑程に作られて居る。

支那古代の陶磁器も、紀元二千數百年前、黃帝の時には、既に土器が作られて居り、黃帝と餘り時代が隔たらぬ、舜の時には「河濱に陶して、歪みも疵も出ず」と云ふ事が「史記」に書かれて居る様に、支那の上古時代に無釉陶磁として、完全なものが作られて居た様である。

陶磁器として、釉を施されたものが支那で、創めて出來たのは、色々の文献に依つても、漢代からであつて、其以前には無かつた様である。

漢代に施された釉の類は、鉛を多量に含んだ釉で、我國で交趾釉とか樂釉とか云ふ種類の釉に類したものが主として用ひられた様である。「漢代の綠瓷」などは、鉛釉に銅鹽の含まれたものである。鉛釉と共に、アルカリ性の硝子釉も應用されて居る、之は古い「ベルシヤ」の陶器などに施されたものと、殆んど同性質のもので、硝子を粉末にして、水で解いて用ひられたものである、我國では此種の釉を「白玉釉」とか「フリット釉」とか云ふて居る、實物は見ないが華人の珍玩する「晋の標瓷」などは此種のものであらうと思ふ。

之等の釉薬は何れも、極めて低火度で熔融するものであるから、焼き上げるには非常に容易く、我國で樂焼を簡單に作る様に、窯なども頗る原始的な幼稚なもので差支ない、此種の釉薬は兩種共に、創めは主として西域の硝子の傳來に影響されて作られたもので、支那でも西域から直接影響を受け易い北支那で盛んに作られてゐた様である、尙ほ之等の釉の傳來に就いては、中尾萬三博士が、先年陶雅集第四「支那陶磁源流圖考」に依つて、委しく論述されてゐる。

支那は漢代までは日用器具其他萬般の器物が銅器を以て盛んに鑄造されて居り、彼の周及び三代等の銅器は其品質、紋様等の技巧に於て頗る完璧なものを製出してゐたのであるが、一朝銅材の缺

乏に際し、之に替はるべきものとして陶器の製造が盛んに行はれる様になつたのである。

然し唐代までの陶磁は、低火度で焼かれてゐる爲め、質が脆弱であつて日用品として使用に適しないのと、釉色、釉光等が單調で、趣きがない點から、勢ひ之に適應するものとして質が堅緻で、實用に適し、胎質、釉調共に調つたものゝ要求に對し、唐代に到つて、高火度で焼く陶磁器が創造されたのである。

之は始め南方支那の浙江、江西方面で作られたので、浙江の越州窯、江西の饒州窯などは、其最も古い歴史を持つた窯であつて完全に炆器として、磁器として、胎質の堅き、焼締り、釉調の色澤などに申分のないものである。

支那が窯藝の上に於て、唐代から宋代、明代、清代と相續いて、非常なる發達を遂げて、「支那の陶磁」「陶磁器の國」としての支那」として、世界に並ぶものゝない名聲と、榮譽とを擅まゝにするに到つたのは、偏に此高火度の陶磁の創製に依るのである。

之等の高火度で焼く陶磁を作り出した唐代の窯は、南方支那では

○千峯翠色磁として名高い浙江の越州窯、吳越の秘色窯。

○青磁の窯として名高い、宋の龍泉窯の祖とも云ふべき浙江の温州窯。

四

○唐の武徳年間に陶玉が白瓷を焼いて、假玉器と稱へて朝廷に献じ、又武徳四年に鶴仲初が、「色白く土培膩にして質薄く、瑩鎖にして玉の如き瓷」を作つて、天下に磁器創製の生聲を挙げたと云ふ江西の饒州窯。

○茶經に「越瓷は玉に類し、邢瓷は銀に類す、越瓷氷に類し、邢瓷雪に類す、越瓷茶の色縁にして、邢瓷茶色丹し」と云はれ、越州窯の磁と、並び賞玩された直隸の邢州窯。

○雨過天青瓷として、宋の汝、官、均窯の範を作つた河南の後周の柴窯。

之等の數窯が唐代より宋代に到るまでの高火度焼成の有名な窯である。
宋代に到つては、各地競つて陶磁の製造に窯を起し、其勃興は一朝にして華咲く如き盛觀であつて

河南の官窯、均窯、汝窯。直隸の定窯、磁州窯。山西の霍州窯。陝西の耀州窯。山東の博山窯などの主なる北支那の諸窯。

南方の窯としては四川の蜀窯。江西の饒州窯、吉州窯。浙江の哥窯、龍泉窯、麗水窯、修内司窯、

江蘇の鼎山窯、蜀山窯。福建の建窯、德化窯。廣東の石灣窯など主なる窯が、各自獨特の陶磁を焼き出して、其粹を競ふに到り、支那の他の工藝は、殆んど陶磁に壓せられた趣きがある。

明代に到りては、朝廷が官窯を江西の景德鎮に設け南北の特長を取つて之を一丸となし、支那全國の陶窯を殆んど統一した觀がある。清朝に至つても相續いて名陶、佳磁を多量に産し、世界人士を驚嘆せしめるに到つた。其最も黄金時代とも云ふべきは、明末、清初であつて、嘉靖、萬曆、康熙、雍正、乾隆朝を其極頂と云ふべきである。

二、系 統

支那古代陶磁器の系統は前述の如く、北方支那では、西域方面の影響を受けてゐる所が甚だ多い。然るに南方支那では、幾分南洋方面の影響はあるかも知れないが、主として南支那の人によりて、獨創的とも云ふべき高火度焼成の陶磁が、製陶上自然的の發達によつて創造せられ、完成せられた事は、支那陶磁の系統を述べる上に於て、特筆せねばならぬ所である。

此二系統の主なる技術上の差異は、窯の構造が全く異つてゐる事である。西域の影響を受けたる

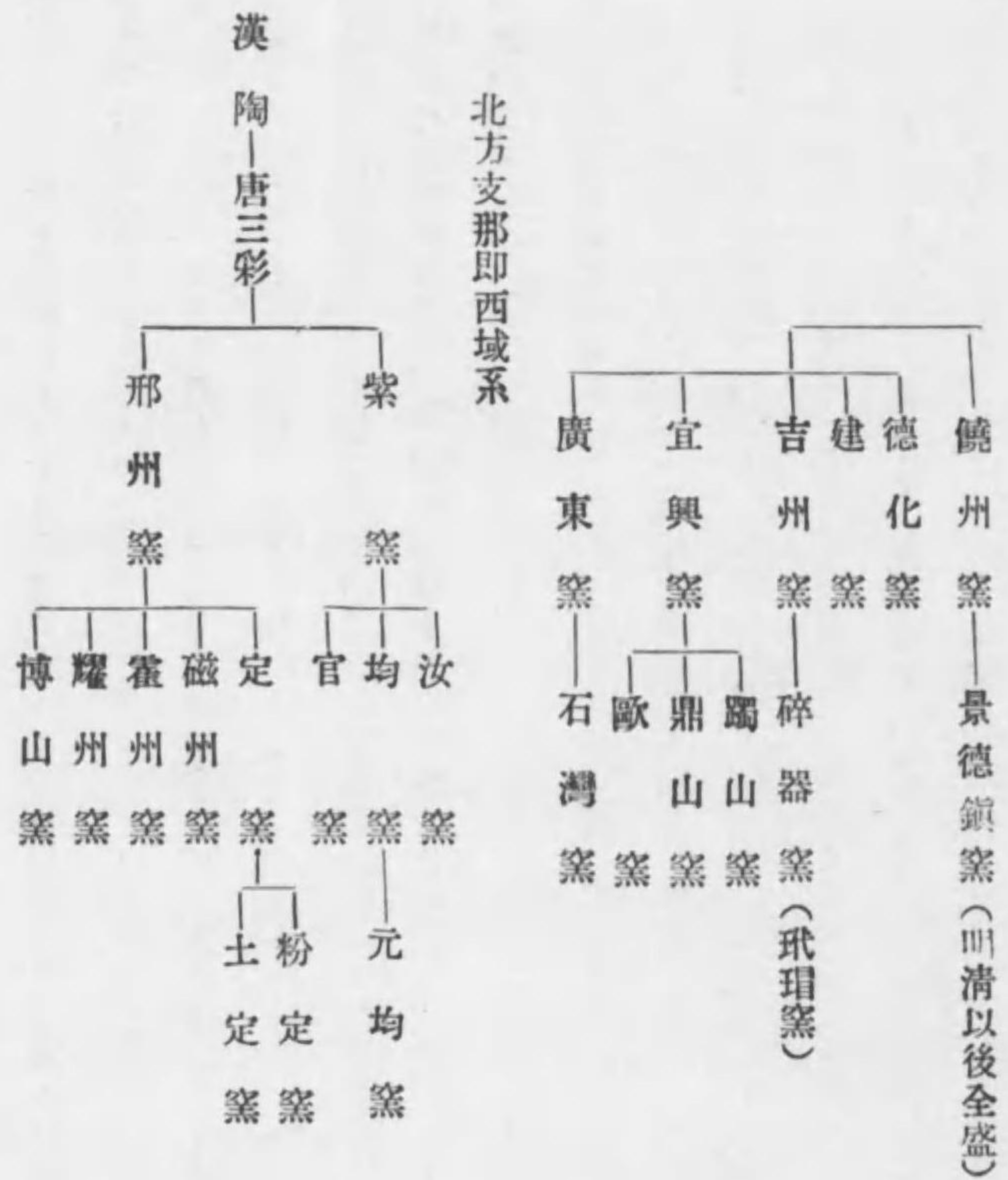
ものは、饅頭窯と通稱されてゐる平窯であつて、燃料としては雜草か石炭末が用ひられてゐる。之に比し南支那の窯は斜面に築かれた登窯であつて、燃料は松、柏、杉材などが用ひられてゐるのである。故に其焼成焰の性質なり、窯の焚上時間なり、通風なり、冷却なりが非常に異つてゐる爲め、製品に於ても南北兩系統に於て、著しき差異が生ずるのである。又原料、成形法、紋様、其他の技術上の點にも差異があるが詳述を略する。(詳細は拙著「陶雅集第五」(陶雅)「堂談圃」を參照せられたい)

此二系統を假に南方支那の窯を南蠻系とし、北支那の窯を西域系とすれば、次のやうな略表を作る事が出来る。

南方支那即南蠻系



北方支那即西域系



今各窯の所在地と年代及各窯の略述に就いて「景德鎮陶錄」に載せてゐる點が最も簡明であるから次に譯載する。

定窯 宋代に始まり直隸の定州から出る。南定器、北定器の二種がある。土脈細膩、質薄く光素く、凸花、劃花、印花、繡花等の種類に分れてゐる。牡丹、萱草、飛鳳花式が多い。白色で滋潤なのが最も正しとせられ、白骨胎の上に泐水を以てし、涙痕のやうなものがあるのが佳い。俗に粉定と呼び又白定と云つてゐる。其質が粗で微しく、黄なものは餘りよくない。俗に土定といつてゐる。東坡が試院で茶を煎る詩を作つた時「定州の花瓶紅玉を琢す。」と蔣記に載せてゐる。景德鎮の陶器に「饒玉」との稱がある。眞定の紅瓷と相競ふに足るから即ち定器に又紅のものもあるのである。間々紫定、黒定をも造るが唯紅、白の二種だけは當時之を尙んだ。

邢窯 直隸の順德府邢台縣から出る。唐代から已に焼いてゐる。土細かく質膩し。色は素を尙ぶ。昔白瓷と稱したが、今亦描青雜式なものがある。茶經に「世に邢州瓷を以て越器の上に處く。然れども邢瓷は銀に類し、雪に類す。邢瓷は白くして茶の色丹きは越に如かざるに似たり」と云つてゐる、が茶經は茶を品するに上の瓷を云ふのみである。邢器も亦觀るに足る。

磁州窯 磁州に始まる。昔河南の彰德府に屬してゐたが、今は直隸の廣平府に屬す。磁器と稱するは蓋し此れ又磁石にて泥を製し坯と爲すに基づく。陶成りて名づける所以である。器の佳なるものは定と似てゐる。但だ涙痕なく劃花、綉花がある。其素いものが價が定より高い。宋代にありて固より著はる。今人訛り陶窯瓷品を以て、概ね呼んで磁器となすは、別に此種の窯あるを知らないからである。

榆次窯 此れは西窯である。即ち太原府の榆次縣である。唐代より已に陶してゐる。土は粗で質厚く、其器は古樸である。

平陽窯 亦西窯である。平陽府で唐、宋時代から焼いてゐる。甗窯がある。大にして器を容れること多く。土窯といふのは、小にして器を容れることが少い。土は壤白、汁水は純を缺いてゐる。故に器色に傳へるべきものはない。

彭窯 元代に彭均寶霍州にて燒造した。土脈細白、埴膩、體薄く素を尙ぶ。古定器の製に倣ひ、折腰の様甚だ整齊したのは、當時彭窯を以て稱す。其佳いものは定と相埒し、因て亦新定器と呼ぶ。

霍州窯 亦今の西窯であつて唐宋に始まる。土細壤で質は膩す。體薄く色多くは白い。平陽の造る所に較べると佳い。當時之を分つて霍器と云つた。

汝窯 汝は汴京の轄する所、宋は定州の白器に芒あり、用ふるに堪へないから遂に汝州に命じ青器窯を建てた。土は細潤で銅の如く、體重く厚薄あり。色は雨過天青に近く、汁水の瑩厚なること堆脂の如く、銅骨無紋、銅骨魚子紋の二種がある。格言要論に「汁中の椶眼隠たること蟹爪の若きもの尤も佳し。」と。又輟耕錄に「河北の唐鄧耀州悉く之に仿ふ。而して汝窯を魁とす。」と云つてゐる。底に芝蔴花あり。細小に挿釘するものを當時最も珍尙した。

官窯 宋の大觀政和の間、汴京に自ら窯を置き燒造して官窯と云ふ。土脈細潤體薄く、色は青く粉紅を帯び、濃淡一ならず。蟹爪紋紫に鐵足がある。大觀中の釉は月日、粉青、大緑の三種を尙ぶが、政和以後は唯だ青に濃淡を分つのみである。

東窯 北宋東京の民窯で、即今の開封府陳留等の地である。土脈黎細、質頗る粗厚で淡青色亦淺深がある。紫口鐵足多く紋はない。官窯に比べると器少しく紅で潤ふてゐる。

均窯 宋の初に燒く所で釣臺から出る。釣臺は宋であつて又均州といふ。今の河南の禹州である。土脈細にして釉は五彩を具へてゐる。兔絲紋がある。紅なること臙脂砂の如きが最も佳い。青きことを葱翠の如く、紫は墨の如きは之に次ぐ。三者の色純にして少しも雜らないものを上とする。底に一二の數目字號記となすものがあつて佳い。青黒錯雜して涎を垂れる如きは、みな三色の燒け足らないもので、別に此の様があるのではない。俗に梅子青、茄皮紫、海棠紅、猪肝、驢肺、鼻涕、天藍等の名を取る。蔣記に「近年の新燒は皆砂土を骨となし、釉水は微しく似たり。製に佳なるものあれども俱に久しきに耐えず。」と云つてゐる。

洛陽陶 亦元魏の燒造で、即今の河南洛陽縣である。初雲中に都し、後都を此に移す。故に又洛京と曰ふ。陶する所は皆供御の物である。

柴窯 五代の周の顯徳の初に燒出す所である。北河南の鄭州は其地である。本と陶に宜し。世宗の姓は柴である。故に名づける。然れども當時は亦御窯と稱してゐた。宋に入り始めて柴窯を以て之を別つ。其瓷の青きこと天の如く、明なること鏡の如く、薄きこと紙の如く、聲は磬の様である。滋潤細媚にして細紋がある。製精しく、色の異なること古來諸窯の冠たり。但だ足に粗黄土多きのみである。

唐色窯 宋の時の燒造である。今の南陽府の唐縣である。昔青瓷と稱したが質洶は汝器に及ばな

す。
鄧州窯 亦宋代の燒く所にして、即南陽府の鄧州である。皆青瓷であるが未だ汝器の滋潤なのに及ばない。

許州窯 明の河南の許州で燒造す。磁石を製して之を爲せど亦瓷器である。色様皆花がある。素きこと磁州の新近なものに較べると優つてゐる。或は窯は宋に生まれりと曰ふ。

懷慶窯 河南の懷慶府から出る。明から今に至るも尙ほ燒造してゐる。

宜陽窯 明の陶であつて即河南の宜陽縣である。今尙ほ燒造してゐる。

登封窯 亦明より始まる。即河南府の登封縣で、今尙ほ陶して居る。

陝州窯 河南の陝州である。燒造は明より始まり、今尙ほ陶して居る。

兗州窯 明以來燒造するもので、即今兗州府鄒嶧等の處で陶して居る。

蕭窯 徐州府蕭縣の白土鎮から出る。一に白土窯と曰ふ。亦宋代の燒造であつて、厥の土は白うして壤げり。質頗る薄く澤あるもの白器の製式規範頗る佳い。

歐窯 明代の燒造で江南の常州府である。宜興の人某の歐姓なる故に皆歐窯と呼ぶ。哥窯の紋片に仿ふものがあり、官均窯の色に倣ふものがあつて、彩色甚だ多く、花盤匱架の諸器と俱に、其の紅藍紋釉の二種尤も佳く、昌南の唐窯も嘗て之に仿つた。

龍泉窯 宋初、處州府龍泉縣琉田市の燒く所、土細瑣質頗る厚く、色甚だ葱翠、亦淺深に分つて紋片はない。一等盆あり。底に雙魚あり。盆外に銅環の器質厚實なものがある。摩弄するに耐えて茅蔑し易くない。只だ工匠稍拙く、製法が甚だ古雅でないばかりである。

哥窯 宋代の燒く所で、本と龍泉の琉田窯である。處州の人、章姓兄弟分け造つた。兄の名は「生一」。當時其陶する所を別つて哥窯と云つた。土脈細柴にして質頗る薄く、色青く濃淡一でない。紫口鐵足があつて斷紋隱製すること魚子紋のやうである。唯だ米色、粉青の二種、汁の純粹なものが貴い。

章龍泉窯 即生一の弟章生二が陶せる所のもので、龍泉の舊に仍りて又章窯とも號し、或は處器青器とも云へり。土脈細膩で質は薄い。又粉青色、翠青色がある。深淺は一でない。足亦鐵色、但だ紋片少く、古龍泉の制度に較べると、更に細巧精緻を覺える。今に至るまで溫處の人猶稱

して章窯といふ。

東歐陶 歐越である。昔閩の地に屬し、今は浙の温州となつてゐる。晉代から陶し、其の瓷は青く當時着稱す杜毓が萍の賦に所謂器澤にして東歐より出づるもの云々とは是である。陸羽の茶經に「甌越の器青くして口に上る。唇は卷かず。底は卷き淺く、半片已下を愛す。」と云つてゐる。

越窯 越窯にて焼く所で唐代に始まる。即今の浙江紹興府である。隋唐にては越州と云つた。瓷色青く美を一時に著はす。茶經に「盃は越州を上とす。其瓷玉に類し冰に類す。青くして茶に益し。茶色の綠なるは邢瓷も如かざるなり。」と云つてある。

秘色窯 吳越にて焼造するもの、錢民國を有する時越州に命じ焼きて進めしめ、供奉の物となし、巨甌は用ふることが出来ない。故に秘色と云ふ。其式越窯器に似て清亮なことは尙ほ上である。

餘杭窯 亦宋代の焼造で、乃ち杭州府の餘杭縣である。色は官瓷に同うして紋無く瑩潤でない。

麗水窯 亦宋代の焼造で、即處州の麗水縣である。亦處窯とも云ふ。質は粗で厚く、色は龍泉の如く濃淡はあるが工式尤も拙い。

象窯 宋の南渡後の焼造であるが出處は未だ詳でない。蟹爪紋がある。色白く滋潤するを以て貴とす。黄にして質の粗なるものは品低し。

壽窯 唐代の焼造で江南の壽州である。瓷色は黄である。茶經に「壽瓷を以て最下とす。」と云ふ。黄なれば即茶色紫にて宜しくない。

婺窯 亦唐の婺窯で焼く。今の金華府が是である。茶經に「又以て婺器は鼎瓷に次ぎ壽洪器の能く及ぶ所に非ず。」としてゐる。

宿州窯 宋代の焼造にかゝり、今の鳳陽府の宿州である。器は空色に仿ひ、當時行尙が頗る廣かつた。定窯の器滅じてから後にして、此地では多く市に定器の代りに充てた。しかし固より眞の定窯には及ばない。

泗州窯 江南の泗州は宋代にも亦陶し、悉く定窯の器色に仿つたが、但だ時に著れず。其値の賤しきものを食りて、多くは市に定器に充てたり。或は云ふ泗器實に宿窯と相埒しと。

碎器窯 南宋の時に焼造するもの、本と吉安の盧邑の永和鎮なるが別に一種の窯である。土粗く堅く體厚く重く、亦米色粉青様を具へ滑石を用ひて配し、釉走りて紋塊碑の如く、低墨土緒を

以て既に成るの器を捺薫し然る後に揩淨すれば遂に紅墨を隠合して紋痕冰碎観るべし。亦碎紋の素地で青花を加ふるものがある。

洪州窯 洪州にて焼造するもので亦唐代に見ゆ。洪州は今の南昌府である。格言要論に「江右の洪州器は黄黒色。」と云ひ 茶經は「洪州瓷は褐にして茶の色を黒からしむ。品更に壽州に次ぐ。」と云つてゐる。更に陸細は「褐色にして黄黒。」と云つてゐる。

吉州窯 宋の時の吉州永和市の窯で、即今の吉安府廬陵縣である。昔五窯の中惟だ舒の姓にて焼くものは頗る佳し。舒の翁工みに玩具を爲くる。翁の女を舒嬌と名づけ、尤も陶を善くす。其の罇瓮の諸色は幾んど哥窯と價を等ふす。花瓶の大なるものは價數金にして小なるものには花がある。格古要論に云つてゐる。「體厚く質粗くして甚品とするに足らず。」と。

臨川窯 元の初めに焼造す。即今の撫州府の臨川縣であつて、土埴細に質薄く、色多くは白微しく黄にして粗花のものがある。

關中窯 元魏の時に焼く所にして關中から出る。即今の西安府咸陽等の處、陶は以て御に供す。

鼎州窯 唐代に鼎州で焼造せり。即今の西安府の涇陽縣である。陸羽の茶經に「鼎州の瓷盃は越

器に次ぎ、壽洪の陶する所に勝る。」と推せり。

耀州窯 耀州は今西安府に屬す。亦宋焼であるが青器の色、質共に汝窯に遠ばず。後に白器を燒き頗る勝れり。しかれども陶成りて皆堅緻ならずして茅損し易く所謂黃浦窯である。

秦窯 唐代の焼造、今の甘肅の秦州である。相傳ふ。器は皆碗盃の屬であつて多くは純素である。亦凸魚水紋のものありと。

岳州窯 湖南の岳州府は唐代にも亦陶す。瓷は皆青し。茶經に「又婺瓷に次ぐ。」と謂ふ。然れども青は固より茶に宜しく、茶白紅の色をなすこと、悉く壽州、洪州のものに勝る。

蜀窯 唐の時四川功州の大邑にして焼く所。體薄ふして堅緻、色白く聲清く、當時の珍重となる。

廣窯 廣東の肇慶府陽江縣の造る所に始まる。蓋し洋磁に倣ふて焼くも、故に志に云へり「廣の陽江縣に磁器を産す。當に罇瓶瓊瑤碗盤壺盒の屬を見るべし。甚だ絢彩華麗なるも、精細雅潤なるは瓷器に及ばず。未だ刻肩露骨の相の厭ふべきあるを免れず 然れども景德鎮の唐窯會つて之を倣ひ、雅潤觀るに足ること廣窯に勝る。此れと磁州許州等の器と皆瓷土の成る所の

ものに非るなり。」陶成紀事に云へり。「一に廣釉の釉色及び青點窯の一種に倣ふ。」と按ずるに、此も亦唐廠の倣ふ所である。

三、品 質

支那の各窯の陶磁器は、各窯によつて各々其品質を異にすると共に、又時代によつても變つて來てゐる爲に、之を詳述する事は中々至難である。且つ陶磁器の品質に就ては、胎質の細粗、焼上りの堅緻、焼締り、胎色の差があり、釉質も亦其光澤、色調、透明度、顔色の調子、等に種々の變化があり、形状、作り方、紋様など色々な點に於て各窯の特色があるが中々複雑であるから、茲に極めて大體を説明する事にする。

支那では陶磁器の素地の事を「胎」と云ひ、磁器質のものを「磁胎」と云ひ、其内白色の磁器質で厚手のものを、「石胎」と云ひ、薄手で幾分透明性に富むものを「脱胎」と云つてゐる。白色で胎質の焼締りが磁胎にならず、幾分吸水性のある程度のもを「漿胎」と云ひ、素地が有色で、鼠色、帶黃色、黄褐色のものにて、吸水性が殆んどない程度まで焼締つたものを、「缸胎」と云つてゐる。

「缸胎」の胎色が濃くて、褐色、黒褐色を呈して、良く焼締つて、吸水性ないものを「鐵胎」と稱してゐる。

普通陶磁器の一般的分類は、土器、陶器、炆器、磁器と別けられてゐて、土器は無釉のもの、陶器は漿胎で釉の掛れるもの、炆器とは、「缸胎」若しくは「鐵胎」に釉のあるもの、磁器は磁胎に釉の掛れるものゝ類である。支那の各古陶磁窯の製品の胎質に就て大體分類して表にすると次のやうである。

支那古陶磁器分類略表





磁器としての、景德鎮窯と德化窯とは。景德鎮窯は、我國の瀬戸焼、有田焼、九谷焼、京都の清

水焼に類したものであつて、青味を帯びた薄手の多い白色磁である。德化窯は厚手のものが多くて、古い明代のものは、象牙色から淡黄色を帯びた色合のものがあつて、近代のものには、景德鎮窯と同じ手の、青白色の白磁が製作されてゐる、秘色窯、修内司窯の陶磁の内に透明性の一名「宋影青器」と稱する脱胎質の青白磁がある、主として碗類であるが其の成形の整つた點と其彫紋様の精巧な事は粉定窯の碗に比し遜色がない、我國で上代青磁の内の「ひそく」として珍玩する手のものも之等と同種のものであらう。德化窯は牙白色のものと青白色の白磁とあるが牙白磁のものが古く、青白色のものは新しい様である、牙白色のものは我國で白高麗手と云ひ、支那では「建白」と云つて此手は一見粉定窯と同じ様に見えるが「建白」は厚手で透明性であるが粉定は薄手で不透明である、又青白色の白磁は主として清朝になつてからの德化窯であつて牙白磁に比し大分劣るものである、景德鎮窯の白磁と共に之は一名瑱白器と云はれて、牙白磁に比し劣るものである。

半磁器とは白色の胎で、良く焼締つて吸水性なく、磁器の様に透明性を持つてゐないものを指したのである。越州窯、秘色窯、修内司窯の青白磁には還元焰で焼かれたものであるが、立派な透明性を有してゐるものと有してゐない所の此半磁器系のもものがあつて何れかと云へば透明性の無い

ものが多い様に思ふ。

透明性の種類のもは朝鮮の高麗朝の遺跡から澤出發掘されてゐる、高麗青白磁と云はれてゐるものに殆んど變りはないから此の技術系統が何れの點まで同一系であるか大に攷究を要すべき點である。此の朝鮮青白磁の窯は未だ發見されてゐないが、南鮮の方で焼かれたものなる事は疑ふ餘地はない、定窯の内には粉定窯と通稱されてゐる牙白色調の薄手の白窯は、主として碗類が多い様であるが技巧の極めて鮮やかなものである。之も透明質な所がなく、硬く焼き締つた胎であつて徳化窯と同じく酸化焰で焼かれたのである。

有色炻器として、均窯、元均窯、汝窯、官窯、龍泉窯、哥窯、建窯は、其胎色が暗黝色から暗褐色、黒褐色などを呈してゐて、何れも吸水性がなく、破面は貝殻狀を呈してゐる。色は建窯が最も濃く一名烏泥窯と云はれてゐる位である。哥窯、修内司窯は之に次いで濃く龍泉、汝官、均窯は稍胎色は淡い様である、胎の破面の焼上りの程度は、龍泉窯、修内司窯、哥窯、建窯等は光澤強く、均、汝、官窯等は光澤少い様である、廣東窯、鼎山窯、などは殆んど破面に光澤なく、時には吸水性のあるものがある。吉州窯は胎色最も淡いもので、破面は貝殻狀を呈してゐるが光澤は餘り強く

ない、鼎山窯は建窯に次で胎色濃く廣東窯は吉州窯に稍濃き程度のものである。陶器の内、白色陶器に屬するものでは、磁州窯、博山窯其他、北支那に色々の窯があるが此表には北支那白色陶器の代表として、生産高の最も多い磁州窯及び博山窯を擧げて置いた。唐三彩瓷は、河南の洛陽附近で焼かれたものが多く残つており、夫れは白胎のものである。磁州窯、博山窯の類は白胎と云ふより寧ろ、淡黄胎である。そして白色に見せる様に「化粧掛」をしてある、模様は普通黒繪が付いてゐて、我國で繪高麗手として珍重される手のものである。有色陶器としては、漢代の綠瓷の類が赤煉瓦のやうな胎であり、江蘇省の蜀山窯の朱泥、紫泥、梨皮泥、などは何れも有色陶器の代表的のものである。

釉薬に就ては、前述の如く、漢唐時代の西域の直接傳來とも云ふべき鉛釉、又は硝子釉などの極めて低火度で熔融する性状のものと、唐代創製の高火度焼成に用ひられた草木の灰を主として應用せる灰質釉薬とに大別する事が出来る。釉料としての草木の灰は、各種のものが應用されるのであつて、江西の景德鎮では、羊齒類の灰で普通鳳尾草の灰を用ひてゐる。龍泉窯の青磁の釉料としては、蜜柑の類又は枳殼の類の灰を應用してゐる、又浙江省、朝鮮の南方地方、及び我國の九州地方

の青白磁の上等のものには、柞の木の灰などが應用され、下等品には松の木の灰が用ひられてゐる。乳白釉としての河南の均窯、官窯などは、穀物の類の灰を應用し、江蘇省宜興の鼎山窯の「宜均釉」我國では、俗稱「海鼠手」と呼ぶ釉の失透質釉料として、穀物の灰の外に「窯汗」と稱し、石灰燒窯の窯肌に出来る燒塊を用ひて失透せしめてゐる。清朝の初期から、純白色の釉を掛ける爲めに灰の替りに石灰石を多量に用ひられるやうになつた。

支那明代までの單彩釉の色釉薬の顔料は、主として銅鹽と鐵鹽とであつて、滿漣、コバルト鹽の呈色のものもあるが、殆んど鐵と銅と云つてよい。

銅鹽は、陶磁器の釉薬を熔合して呈色反應を起すには燒成熔融の際に酸化作用に對しては、綠、青、藍色を呈し、還元作用に對しては、紫、紅、黝色を呈する爲め、銅鹽による漢代の綠瓷、翡翠釉、綠郎窯、孔雀綠などの青綠釉は酸化燒成によるのである、又宋代均窯の紅紫釉、明代の霽紅、康熙の郎窯の紅瓷は、凡て銅鹽の呈色によるのであつて、銅鹽の呈色變化は穎敏である爲、窯燒成の際に於ける燒成焰の變化に伴ひ、鮮明なる種々の色調變化を現し、「辰砂窯變」として一般に珍玩される様なものが出来るのである、鐵鹽の燒成焰に依る色調變化は發色反應が鈍い爲に、鮮明なる

色合に焼き上げる事は中々至難である、鐵鹽を含有した釉薬が燒成熔融の際に酸化作用の際には、黃色、褐色を呈するが、還元焰の際は青綠色を呈するもので、鉛釉、鐵砂釉、伊羅保釉、芝麻醬釉などの黃褐色のものは酸化焰であり、青磁釉の類は凡て還元焰燒成である、青磁釉が黝色になり勝ちなのは、完全に還元燒成が出来ないからである。

鐵、銅鹽以外の金屬鹽で古くから應用されてゐるものは滿漣、コバルト鹽などであつて、之等は單味ではなく、主として鐵鹽などに混つて來るのであつて、滿漣鹽の呈色反應は餘り強くないが、コバルト鹽は非常に強く、極く少量含まれてゐても、鮮明なる呈色反應を現はすため、雲南省の「碗花」我國では「吳須」と云ふ陶磁器顔料などは、鐵鹽、滿漣鹽の含有量多く、コバルト鹽は至極少量であるに拘らず、色調は殆んどコバルト鹽の呈色のみが鮮かになるのである。

茲に唐宋時代の單彩釉の燒成焰の關係と釉色と其呈色劑に就ての概略を表示すれば、

(一) 酸化焰燒成系

粉定窯	白色	化粧掛けを施し下繪付けは鐵による
磁州窯	白色	黒色、黒定、紫定と稱せらるゝ鐵釉あり、

汝窯 青色 銅に依り釉色青し
 紫窯 青色 同上
 均窯 青色 又は紫色の交じる事あり

明徳化窯 白色 (清朝以降のものには還元されて青味を帯ぶるもの多し)

(一)還元焔焼成系

均窯 紫紅色 銅分に依る
 越州窯 青白色 鐵分に依る
 龍泉窯 青色 同上
 哥窯 青色 同上
 饒州窯 (景德鎮窯)青白色又は白色 鐵分に依る
 建窯 黑色 鐵分に依る

上記のものゝ内に、酸化、還元焼成に別けたが、此等の中間性とも云ふべき、中性焔焼成の場合もあるが、之は、何れの窯も常に一定に焼上げる譯に行かぬから、嚴格に、之等を區劃する事は出

來ぬ、唯だ、出來上つた製品で其際の狀態を考察するより外は致方がない。

之等の唐宋時代の單彩釉系のものゝ外に、明代に到つて非常に發達した、多彩系の陶磁類、即ち「青花」、「釉裏紅」、「五彩」、清朝に到つて創製された、「粉彩」、「洋彩」、の類がある。

「青花」は吾國で「染付け手」と云ふ種類のもので、現今東洋の陶磁器として、最も多く作られ、最も一般的のものである。明初に創製され、明代の永樂、宣徳、成化、嘉靖、萬曆、清代の康熙朝何れも獨特の調子を色合、紋様に現はし各「青花」の妙趣を示して居る。永樂、成化、正徳のものは、色合、紋様、等が黒味掛つた、古雅素樸の感のものが多いが、宣徳、嘉靖、萬曆のものは、色合其他に於て、華やかな派手な調子のもが多い様である。許之衡は「說瓷」に、明瓷の青花の人物は、筆意高古疎蕩であつて、花瓣は極めて整齊なものであり、龍鳳奇獸を畫いたものは顔色深く、釉は骨に入つて、時には、古拙の致を露はして居る、特に萬曆の描畫、模様などは又別致のもので、其筆意と云ひ「ダミ」の調子などは、前後に卓絶して居る。清朝のものにて、特に康熙のものは、色調濃く、人物、動物等の描畫を得意とし、耕織圖のものなどを珍玩される、雍正の青花は少しく派手な色合のものが多く、花瓣草蟲などのが良い、乾隆の青花は、精巧、細密な點に於て、

他の追隨を許さないが、一體の調子が、餘りに技巧に捕はれ過ぎて、氣品に乏しく、數寄者には喜ばれない、道光、光緒などにも、青花のよいものがあるが、明末、清初のものに比しては雲泥の差がある。

「釉裏紅」宣德朝に初めて作られ、吾國では一名「鮮紅窯手」と云つて居る、之は紅寶石を粉にして繪具にしたものであると通稱されて居るが、主なる顔料は、銅鹽である、「五彩」明初に創製されたもので、嘉靖、萬曆を最上とし、康熙のものは之に次ぐ、抹紅彩、抹紅金彩などのものもある。

「粉彩」清初康熙の末年、又は雍正朝の初期に創製されたもので、「五彩」を硬彩とし「粉彩」を軟彩とも稱せられ「五彩」と共に清代以降のものに盛んに應用せられた、雍正の粉彩が最も優なるものとされて居る。

「洋彩」乾隆朝の時に歐洲より仿ひ、顔料なども輸入されたのであつて、「五彩」「粉彩」に比すると製作の上には、容易であるが、雅趣のないものである。

之等の彩瓷の外に、黒地彩、墨彩、金彩などがある。

斯くの如く、支那の陶磁器は、唐代以後、明末、清初に到るまで、其製作技術に於て、頗る順調

な發達の徑路を有し、多種多様の立派なる作品を出して、世界工藝史上に特筆せらるゝに到つたのであるが、清朝の中期より現代に到るまで、其技頓に衰へ、今は顧みるものさえなき状態にあるのは、残念の極みである。(昭和二年八月)



○小森忍氏製作陶磁器展覽會を十月八日より東京三越呉服店に於て開催の由

○小森忍氏編著「支那古陶磁燒窯略圖」は古代燒窯分布の所在を一目了解すべき重寶のものとて大連市伊勢町二三旬雅會より發售し居れり

○「支那歴代帝王年表」本書は清の康熙乾隆朝の盛時考證學の權威として知られたる齊召南氏畢世の大著にして山根倬三氏之を譯述して地名人名には支那の發音法を附し新に原書に缺如せる明末清初以來本年六月迄に到る事項を補足編述し、尙春秋三國、南北朝、明朝時代の沿岸地圖四葉を添え現代地圖に對照して當時の領域、地名變遷の緣由を瞭然たらしめたるものにして東洋史並に一般支那研究の好資料なり。四六判千二百餘頁定價五圓、東京市麴町區元園町一丁目二十七、支那事情社内東亞研究資料刊行會發行

昭和二年九月二十日印刷
昭和二年九月廿四日發行

東亞研究講座第十六輯「支那古陶磁の話」

複製轉載を禁ず

編輯兼發行者 磯部榮一

印刷者 久保民生

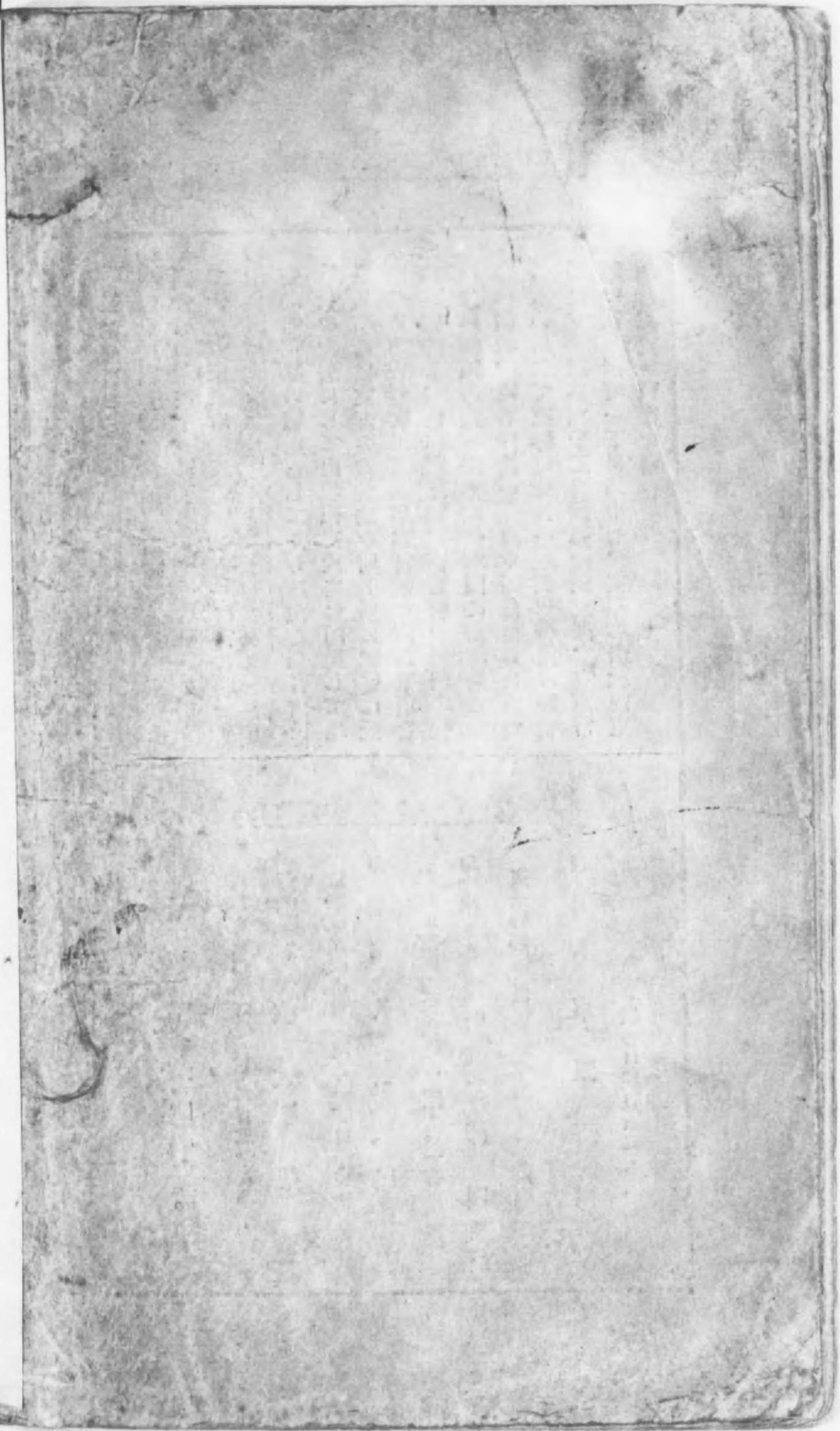
印刷所 商務印刷所

東京府西巢鴨町池袋千二百五十八番地

發行所 東亞研究會

(振替口座東京五八九二九番)

393
756



終